

【講演録】

## 長崎開港とキリシタン文化の開花

滝澤修身

### The Open-port City of Nagasaki and the Flourishing of Christianity in Japan

Osami TAKIZAWA

私は、2019年5月11日（土）に、長崎歴史文化博物館において「長崎開港とキリシタン文化の開花」という題名で講演を行った。この講演は、長崎市長崎学研究所が企画した長崎学ネットワーク会議公開学習会の一環として行われたものであった。本講演は、2019年5月23日（木）の長崎新聞に取り扱われた。今回、その講演録を『純心人文研究』に掲載したい。特に第3章では、現在話題となつてとなっている旧県庁跡地にあった「岬の教会」について、結城了悟（ディエゴ・パチェコ）「長崎の教会—1567年～1620年—」（長崎談叢58、1975年、2～6ページ）を復刻しながら紹介する。

#### 第1章 長崎を通じて日本に普及した文物

##### (a)日本人の地理認識の変化

当時の史料を分析すると、日本人がヨーロッパ宣教師を通じ、いかに世界に関する地理認識を変えていったのかが理解できます。1569年9月15日にイエズス会士ガスパル・ビエラによって書かれた手紙には、ヨーロッパ人到来以前に日本人がどう世界を捉えていたのかが記されています。

「日本の地理は以上のように、さらに日本人は他国に航海することがないので、全世界は三つに区別できると考えています。一つは中国で数多くの国が存在します。二つ目は印度、三つ目は日本で、これ以上の国はないと考えています。」

1582年、九州のキリシタン大名大村純忠、大友宗麟、有馬晴信は、イエズス会日本巡察師アレハンドロ・バリニャーノの勧めで、少年使節団をローマ法皇とスペイン国王のもとに派遣しましたが、その使節団の一人である千々石ミゲルは、こう語っています。

「世界にはさらに多数の国々があり、その大をもって世に知られた州もさらに多く世界には散在し、その数はほとんど無限であり、したがって日本、シナ、シャムの三つの地域ごときは、これらすべてに比すれば、全世界のきわめて微細な一部分にすぎないと考えられることを知った。なお付け加えてあなた方に世界の主な部分を簡単にお知らせするなら、全世界はいと熱心な学者たちの考えるところに従えば、5つの主要な部分に分かれていることをご承知あれ。すなわちヨーロッパ、アフリカ、アジア、アメリカ、及び今一つ、著者たちが未知の土地といっている大陸である。アジアと呼ばれる部分には、われわれのよく知るこの日本、及びシナ、シャムの3国が属し、またアジアには、このほかにも一つ一つ数えるには堪えないほど多数の国々や州がある。」

このように彼が述べるように、日本人はヨーロッパ人との交際を通じて、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカという大陸を認識するに至ったのでした。

#### (b)南蛮美術

日本にキリスト教が広まるにつれ、数多くのヨーロッパ絵画が日本に持ち込まれました。それらの多くは宗教絵画でした。その理由は、この時期には日本には多くの教会が建設され、その装飾のためにヨーロッパ絵画が必要になったからだと考えられます。1583年には、日本に200もの教会が存在したと言われています。フランシスコ・ザビエル、ヨーロッパの王侯、パウロ5世、マリアなどを題材にした多くの洋画が保存されています。一方、日本のセミナリオでも洋画の授業がなされるようになりました。1594年のイエズス会の報告に従うと、肥前の国、八良尾のセミナリオでは、油絵、木炭画、銅版彫刻術が教えられていたことが分ります。

#### (c)洋書

1590年に天正少年使節団が、日本に印刷機とアルファベットの活字を伝えたことにより、日本で初めて印刷が行われるようになりました。こうして、日本で、様々な宗教書が印刷されることになりました。この時から「キリシタン版」と呼ばれる書物が登場することになりました。この「キリシタン版」には、日本で編纂され、印刷された書籍、またヨーロッパから伝えられた書籍が含まれていました。前者では、アレハンドロ・バリニャーノの「ドチリナ・キリシタン」、後者では「九州三候使節記」が良く知られています。現在、宗教文学、ヨーロッパの古典文学、公教要理、辞書類などの「キリシタン版」が保存されています。

#### (d)鉄砲と大砲

鉄砲と大砲は、ヨーロッパ人は日本へもたらしたもののなかでも目立った存在です。なぜなら、伴天連たちがやってきた時代は、まさに戦国大名たちが戦いに明け暮れた時代であったからです。

鉄砲は、1543年に初めて種子島に伝来しますが、その後、日本中に広まり、戦場で用いられることになりました。その結果、戦術や築城法にも大きな変化が生じました。いつ大筒が日本に伝来したのかについては明らかではありませんが、「大友興廃記」に従うと、1584年に、臼杵丹生島の戦いでヨーロッパ製の大筒が使用されていたようです。また、「国友鉄砲記」によると、木下秀吉が、2.7メートルの二つの大砲を、織田信長に献上したとあります。

#### (e)印鑑

16世紀の末にかけ、キリスト教とその文化が日本に広がっていきまると、幾人かのキリシタン大名たちは、アルファベットを刻んだ印鑑を使用する者も現れ始めました。今画像に映っているのは、左から大友宗麟（洗礼名はフランシスコ）、右上は黒田長政（CURO NGMS）、右下は黒田如水（SIMEON JOSUI）の印鑑です。

#### (f)動物

豊臣秀吉の時代から江戸時代にかけて、多くの「南蛮屏風」が描かれていましたが、それらの屏風を注意深く観察すると、多くの動物たちが贈り物として日本に運びこまれたことが理解できます。例えば、イエズス会士は豊後の大友宗麟にカンボジアの象を贈り、フィリピン総督は豊臣秀吉に同じく象を贈ったことが知れています。また天正少年使節団は、豊臣秀吉にインド副王から贈られた一匹のアラビア馬を献上しました。この他、犬、豚、ヤギ、虎、孔雀、ウサギなどが贈り物として日本にもたらされました。

#### (g)食物

キリシタン時代を通じ、西洋料理も日本に伝えられていたことが知られています。日本人たちはこれらの料理に興味を示し、幾つかの料理は日本文化へ浸透していきました。特に長崎では、ポルトガル人が西洋料理を日本人に伝授したことが知られています。彼らの料理を南蛮料理と言います。ポルトガルの食べ物として知られているものとして、まず、パンがあげられます。パンは、ミサに必要であったため、長崎にて生産され、町中に広がっていきました。今、我々が口にする長崎名物カステラも当時の名残をとどめるお菓子の一つです。カステラという言葉そのものが、スペイン語で城を意味する「カステーリャ」からきています。現在のスペインでも「ソバオ」と言われる、日本のカステラと同じようなお菓子が食べられています。

今、まさに典型的な日本料理とされている「天ぷら」も、実はポルトガル人たちが日本にもたらした料理です（平田萬里遠の『近世飲食雑考』による）。「テンブラ」という名前の起源は、教会用語「テンポラ」に起源を持つとも言われています。テンポラとは、キリスト教の四旬節を現わす言葉です。キリスト教徒は、このテンポラの時期には肉を食べませんので、その代わりに油

で揚げた野菜と少々のお魚を食べる習慣がありました。この習慣が日本に伝わったのです。この料理は、日本人に大変好まれ、江戸時代に日本中に広まっていきました。

#### (h)衣服と装飾品

室町時代から、ポルトガル人たちは様々な衣服と装飾品を日本にもたらししました。それは、ラシャ、ビロード、更紗、襦袢、メリアスなどでした。戦国大名たちは競って、ヨーロッパの生地を武器や着物へと利用しました。織田信長が上杉謙信に赤いビロードのマントを贈ったことはよく知られています。現在、日本人が雨の時に使用する「カッパ」もポルトガルからやってきたものです。

#### (i)典礼用品

日本人キリスト教徒は、キリスト教が日本に根付くと、典礼用品を用いるようになりました。例えば、キリスト、マリア、他の聖人像などです。また、メダル、数珠、宗教書を保存するための箱類、香入れなども使用するようになりました。

#### (j)「西洋音楽」

日本史上で初めて、西洋音楽にかかわる事柄が記録されたのは、ザビエルが来日して2年を経過した1551年のことです。この年、ザビエルは、布教の許しを得るため山口で領主大内義隆に会い、望遠鏡・オルゴール・時計・火縄銃・ガラス器・眼鏡など13個からなる贈り物をしました。このなかに、日本側の記録では、「クラヴォ」（ピアノの前身）らしきものが入っていたことが確認できます。

日本人による最初の西洋音楽の合唱は、1557年の聖週間（復活祭前の一週間）に豊後府内で数回行われた歌ミサが最初とされます。この合唱では、日本人合唱隊に、豊後在住のポルトガル人、トルレス、ヴィレラらの宣教師が加わりました。この時に歌われたのは、キリエ、グロリアなどのグレゴリオ聖歌でした。

楽器については、セミナリヨの時間表には「クラヴォ、ヴィオラその他の楽器」となっていますが、同じヴァリニャーノが作った「神学校内規」には「クラヴォ（チェンバロ）、モロコルディオ（ピアノの前身として、中世からつい最近の18世紀までよく使われていた。）、ギター」を練習することとなっています。

1605年に長崎で出版された典礼書『サカラメント提要』には、19曲のグレゴリオ聖歌が掲載されています。これらは、日本で初めての印刷楽譜として知られていますが、この中にミゼレレ・

メイ・デウスが入っています。この書はイエズス会士ルイス・デ・セルケイラ司教が編纂したものです。

#### (k)日用品

ヨーロッパ人たちがもたらしたもののなかには、典礼用品だけでなく、日用品も含まれていました。例えば、時計、眼鏡、鋏、筆箱、かるた、机、鏡、航海のための機器、楽器などです。この時計は、セバステイアン・ビスカイーノが徳川家康に献上したスペインのマドリッド製の時計です。

#### (l)言葉

キリシタン時代には、幾つかのヨーロッパの言葉、特にポルトガル語は、日本の日常生活で用されるようになりました。未だ、日本で使用されているポルトガル語、スペイン語も見受けられます。例えば、「ビードロ」(ポルトガル語で Vidro スペイン語で Vidrio)、「シャボン」(ポルトガル語で Sabao、スペイン語で Jabón)、「オルガン」(ポルトガル語で Orgao、スペイン語で Órgano)、「カルタ」(ポルトガル語で Carta、スペイン語で Carta) などです。

## 第2章 長崎教会史

#### (a)フランシスコ・ザビエルの種まき

現在の長崎教区の地に、最初にキリスト教の種をまいたのは、いうまでもなくフランシスコ・ザビエルです。1550年8月末ごろ、ザビエルは鹿児島から平戸に来て布教をはじめ、数人に洗礼を授けました。その後、信者の共同体はコスメ・デ・トーレス神父に任せました。つづいてバルタザル・ガゴ神父、ガスバル・ヴィレラ神父、イルマン(伝道師)のルイス・デ・アルメイダらが、教会を育て、洗礼を受けた籠手田家が教会の柱となって日本最初の平戸の教会が生まれました。この教会は、消えることなく今日まで存続しています。

アルメイダはトーレス神父とともに布教の地を横瀬浦、島原、口之津と広めました。1562年には領主大村純忠が横瀬浦の教会で洗礼を受け、日本初のキリシタン大名となりました。その翌年には横瀬浦は破壊されたため、トーレス神父は口之津に移りました。1565年には五島の布教がアルメイダ、ロレンソの2人のイルマンによって始まり、福江と奥浦に教会が建てられました。

1567年にはアルメイダが長崎に入り、大村純忠の家臣で信者の長崎甚左衛門から土地と寺を提供されて布教を始めました。1569年、長崎ではじめての教会である「諸聖人にささげる教会(トードス・オス・サントス)」が完成して、1570年の春には「小さくて美しい」その教会にトー

レス神父も移り住みました。こうしてザビエルの平戸布教から20年にして、長崎各地いたるところで布教が行われるようになりました。

## (b)長崎開港と岬の教会

1570年、大村純忠は、長崎の港を貿易港として開くことを決め、1571年には家老<sup>ともながつしま</sup>の朝長対馬に最初の6町を作らせ、長崎を開港しました。港に突き出た岬（旧県庁所在地）にはフェゲレイド神父が小さな教会を建てました。この「岬の教会」（後に「被昇天のサンタ・マリア教会」と命名）は、次第に大きくなり、日本の教会の中心となるまでに発展しました。1580年、大村純忠が長崎の内町と呼ばれる地域と茂木をイエズス会に寄進すると、長崎は教会とともに発展しました。1583年、興善寺に本部をおくミゼリコルディアの組ができました。1584年にはもう一人のキリシタン大名有馬晴信が、自分の支配下の浦上をイエズス会に寄進すると、浦上にキリシタンが増えました。

1583年には、日本人キリシタン信者は15万人、うち大村領（長崎を含む）のキリシタンは7万人になったとされ、日本中に200もの教会が建てられました。このキリスト教の大きな発展に、天下統一を目指した豊臣秀吉が脅威を感じました。彼は、1587年に突如として「伴天連追放令」を發布し、日本から宣教師を追放しようと考えました。しかし、秀吉は南蛮国との貿易に大変興味がありましたから、彼のキリシタン禁制への態度はあやふやなものとなりました。カトリック教徒であるポルトガル、スペイン人たちは、貿易と布教は一体のものと考えていました。彼らは、秀吉が布教を認めないのであれば、貿易も行わないと断言しました。そこで、秀吉は、教会を破壊したり、再建したりを繰り返すのです。

岬の教会は手狭になったので増改築が進められ、途中で豊臣秀吉の禁教令によって閉鎖されますが1590年に完成します。しかし、2年後に秀吉の命令によって取り壊されて、その1年後、ふたたび許されて建て直されました。傍らにはイエズス会本部ができあがり、1596年には日本司教ドン・ペドロ・マルティネス司教を迎え、一時は司教座でした。1592年には上町にサン・ラザロ病院が建てられミゼリコルディアの組がその経営にあたっていました。おなじころ、浦上の入り口に、もうひとつのサン・ラザロ病院が建てられますが、これらの病院には付属の小聖堂がありました。

長崎の教会は1597年2月5日、26聖人の証を見ました。殉教者たちが尊い血を流した西坂の丘は、その時以来、「聖なる山」または「殉教の丘」と呼ばれるようになり、長崎で最初の公園となりました。26聖人の殉教は長崎の教会の滅びではなく、新しい発展の起点でした。1598年、秀吉は亡くなり、新しい司教セルケイラとヴァリニャーノ神父が長崎に赴任してくると、岬の教会の側には司教館や大神学校が建てられ、教会の改革が行われました。1601年、「岬の教会」（「被昇天のサンタ・マリア教会」）の献堂式がセルケイラ司教の司式によって行われました。このこ



ろ、大村と有馬にも立派な教会が建てられました。

#### (c)長崎教会の黄金時代

1601年から1614年までの13年間は、長崎の教会の黄金時代でした。この間に日本人の7人の教区司祭が誕生（叙階）し、教会も建てられました。山のサンタ・マリア教会、サン・ジョアン・バプチスタ教会（現本蓮寺）、サン・アントニオ教会（本大工町）、サン・ペドロ教会（今町）が1607年までに建てられました。2年後1609年には高麗町（現加治屋町）にあったと考えられています。ほかの修道会も長崎に教会を建てました。1609年にはドミニコ会がサント・ドンミンゴ教会（現桜町小学校）を、1611年にはフランシスコ会がサン・フランシスコ教会をクルス町（現桜町）に、そして本古川町にはアウグスチノ会が、サン・アウグスチノ教会が建てられました。

立山のサンタ・マリア小聖堂には市民が集い、浦上川の岸辺のサンタ・クララ小聖堂はとくに船員に親しまれていました。1606年、大村の宣教師たちが追放されたとき、この小聖堂は増築されて大村と浦上の教会になりました。

このように長崎の町には教会が林立する時代でした。岬の教会にあるサン・パウロ学院は次第に発展して長崎の文化の中心となっていました。毎年のご聖体の行列は厳かに行われ、そのほか祝日も長崎の年中行事として親しまれていました。

#### (d)禁教の嵐が吹き荒れる

しかし、禁教の嵐はこの栄光を突然襲います。それは、キリシタン大名とキリシタン与力が関わる「岡本大八事件」によって引き起こされました。キリシタン与力である岡本大八が、奪われた旧領地を取り返してやるとキリシタン大名有馬晴信に持ちかけました。岡本大八は、幕府の重臣である本多正純に、領地回復を進めてもらうとして、晴信から多額の賄賂を受け取りました。しかし、領土が回復されないため、有馬晴信は、家康の重臣である本多正純に訴えました。ここで、岡本大八がうそをついていたことが発覚しました。この事件によって、徳川家康は、キリシタンに対する信用をなくし、禁教へと走ったのです。

1612年、有馬の宣教師が追放になると、セミナリヨはトードス・オス・サントスに移され、しばらくは発展して増改築され、庭内には殉教者の納骨聖堂ができて巡礼の地になりました。1614年、徳川幕府が禁教令を発すると、全国の宣教師たちは長崎に集まってきました。金沢から追放された高山右近、内藤徳庵とその家族、さらには都の比丘尼たちも長崎に入ってきました。4月に神のあわれみを求める苦行の行列が行われたものの、11月には宣教師や信者がマカオやマニラに送られました。

長崎では教会の取り壊しが始まり、有馬、口之津では多数の殉教者が出ました。1617年には大村で、1619年には長崎で殉教がありました。サン・フランシスコ教会跡にはクルス牢ができて宣教師や信者が入れられ、西坂の丘まで引き連れていかれ、殉教しました。1622年9月10日には「元和の大殉教」が起こり、1633年にも長崎教会にとって重要な殉教がありました。1634年から出島の造成が始まり、1636年に完成してポルトガル人が閉じ込められて、長崎の町からキリシタンの姿が消えてしまいました。

### (e)潜伏の時代

1644年、日本人最後の司祭が世を去ります。この後、キリシタン達は、250年もの間、潜伏してキリスト教の信仰を守り続けることになりました。1614年の禁教令発布の後、教会の破壊や宣教師の捕縛が行われましたが、第4代長崎奉行である水野守信、次の竹中采女正は、一般的信者も含めて徹底的な取り締まりを行いました。

キリスト像などの踏絵を足で踏ませる「絵踏み」、密告者に褒美を与える「懸賞訴人制度」、5戸の組内からキリシタンが摘発されると連帯責任を負わされる「五人組連座の制」、仏教寺院の檀家になることを義務付ける「寺請制度」、「宗門人別改制度」など、万全の体制が整えられた。こうして長崎の中心部からはキリシタンは姿を消していきました。

禁教の徹底で、キリシタンは次第に減少していましたが、自分たちで秘密組織を運営して信仰を続ける「潜伏キリシタン」もいました。信心の道具として「マリア観音」や「納戸神」（納戸などに隠した聖画）などを拝み、集まってオラショ「祈り」を唱え、洗礼を受けました。潜伏組織は地域によって異なりますが、長崎の隣接した浦上では、次のような三役が中心となって組織をまとめ上げました。「帳方」、「水方」、「聞き役」での三役です。

「帳方」は、組織のリーダーで、祝日の日取りを決める「御帳」を差配する役でした。この暦をキリシタンは、信仰の拠り所としました。「水方」は、洗礼を受ける役で、「聞き役」は、水方の助手でした。

1637年から38年にかけては島原の乱が起こり、有馬の教会は全滅しました。潜伏した信者たちは浦上、西彼杵、平戸などの村々に逃れて信仰を守りつづけました。時には崩れと呼ばれる弾圧がありました。1657年には大村の郡崩れ、1790年には浦上一番崩れ、1839年には浦上二番崩れ、1858年には三番崩れ、そして1867年から1873年にかけては浦上四番崩れがありました。この最後の崩れのときは五島列島や大村領（三ツ山）などにも弾圧の手が伸びました。

潜伏キリシタン達の信仰を支えたものに、バスチャンの予言があります。バスチャンとは禁教期に活動した日本人聖職者でした。バスチャンは次の4つの予言を残しました。



- ①お前たちは7代まで、わが子と見ますがそれから後はアニマの助かりが困難となる。
- ②コンヘソーロ（告白を聞く神父）が、大きな黒船に乗ってやってくる。毎週でもコンヒサン（告白）ができる。
- ③どこでも大声で歌を歌って歩ける時代がやってくる。
- ④道でゼンチョ（ポルトガル語で異教徒）で出会うと、先方が道をゆずるようになる。

殉教の地には現在は記念碑が建てられ、巡礼地として多くの信者が訪れています。主な殉教地はつぎのとおりです。長崎地区では西坂の丘、大村の放虎原、鈴田牢跡、雲仙の地獄、島原の今村、南有馬の原城、平戸の生月、田平町<sup>た びらちょう やいざ</sup> 焼罪、西彼町<sup>せい ひちよう</sup>の小千浦<sup>こ しょうら</sup>などです。

#### (f) フランス寺と呼ばれた大浦天主堂

大浦天主堂は日本最古の洋風教会建造物として国宝に指定されています。しかし、大浦天主堂の真の価値は「信徒発見」と呼ばれる、世界宗教史に特筆さるべき出来事が起こったことです。

日本は江戸時代、オランダと中国の2か国以外には世界の国々に対しては扉を閉ざしてきましたが、1858年、アメリカ・ロシア・イギリス・フランス・オランダの5か国と通商条約を結び、鎖国の時代が終わりました。条約に従って開港地に外国人の日本居留が認められますと、来日した外国人の信仰を尊重し、居留地内に礼拝堂の建立を許すことが取り決められました。

長崎の居留地に住むようになった外国人の中にフランスのパリ外国宣教会の宣教師がいました。1863年の1月、長崎に最初に来たフューレ神父は、さっそく敷地を購入し、教会建立に着手しました。同じ年の夏にはプチジャン神父が、11月にはロケーニュ神父が加わりました。

1864年12月29日、ゴシック風の美しい教会が完成しました。長崎市民はこの教会を「フランス寺」と呼び、見物にやってきました。1865年2月19日、献堂式が行われ、フランス領事をはじめ大勢の居留外国人が出席しました。

しかし、招待を受けた長崎奉行が参列を断り、おまけに長崎市民のフランス寺見物も、当日は厳しく禁止されてしまいました。日本人に対しては、なおキリシタンは御禁製の宗旨なのでした。

#### (g) プチジャン神父の「信徒発見」

大浦天主堂から北に6キロほどの浦上の農民たちは、16世紀のキリシタン時代から7世代250年、信仰を伝えてきたキリシタンの子孫たちでした。このように信仰を伝承して来た人々を「潜伏キリシタン」と呼びますが、彼らの最大の願いは神父の再渡来でした。「7代たてばローマのパーパ（教皇）様から送られたパードレ（神父）がやってくる」という伝承が伝えられ、彼らの

大きな希望になっていました。

この浦上村の農民たちがフランス寺の見物にやって来ました。そして見たのです。サンタ・マリアのご像を！「サンタ・マリアがいらっしゃれば、フランス寺の異人さんはパードレさまに違いない」という確信がキリシタンたちの間に生まれました。1865年3月17日、この神父と日本のキリシタンの子孫の出会いが実現しました。これが「信徒発見」と呼ばれています。ここで、信徒を発見したプチジャン神父の日記を取り上げてみましょう。

「昨日の12時半ごろ、男女子供を合わせた12名ないし15名の一団が、単なる好奇心とも思われないような様子で天主堂の門に立っていました。天主堂の門は閉っていたので、私はそれを急いで開けに行きましたが、私が至聖所の方へ進むにつれて次第に、この参観者たちも私について来ました。……私が、ほんの少しだけ祈ったあとでしたか……40才ないし50才位の婦人が私のすぐそばに来て、胸に手をあてて申しました。

「ここにおります私共は、全部あなた様と同じ心でございます。」

「本当ですか？しかしあなた方はどこからおいでになりましたか？」と私はたずねました。

「私たちは、全部浦上の者でございます。浦上では、殆ど全部の人が、私たちと同じ心を持っております。」

それからこの同じ人はすぐに私に聞きました。

「サンタ・マリアの御像はどこ？」(Santa Maria gozowadoko?)

サンタ・マリアによって祝福されたこの言葉を聞いて、私は少しも疑いませんでした。私は確実に、日本のキリシタンの子孫を目の前にしているのです。私はこの慰めを神に感謝いたします。この愛する人たちに取り囲まれて、せき立てられて、あなたがフランスから私たちのために持参して下さった聖母の御像が安置してある祭壇に、彼らを案内しました。私に倣って彼らの全部ひざまずき、そして祈りをとなえようとしたのですが、しかし喜びに夢中になって、聖母の御像の前で口ぐちに言いました。

「そうだ、本当にサンタ・マリアさまだ！ごらんなさい、御子イエズスさま (on KoDjezoussa-ma) を御腕に抱いていらっしゃる。」

#### (h)浦上四番崩れとキリシタン禁制の停止

プチジャン神父と信者の出会いによって250年潜伏してきたキリシタンが、再び司祭の指導を受けるようになりました。しかし、寺請制度によって国民は、どこかの仏寺の檀家になることが強制され、浦上の潜伏キリシタンも止むなく聖徳寺しやうとくじの檀徒となっていました。神父の指導を受けているうちに、キリシタンでありながら聖徳寺檀徒であることは許されないことがわかりました。1867年、「信徒発見」後、はじめて浦上に死者が出ました。浦上の農民は、仏式の葬儀を拒み、聖徳寺と縁を切ることを宣言した署名文書を、庄屋に差し出しました。これをきっかけに「浦上四番崩れ」と呼ばれる最後の迫害が起こったのでした。

日本は明治政府に変わりましたが、政権担当者の思想は、封建時代と変わりませんでした。キリシタン禁制の政策も引き継ぐことを公布し、さっそく浦上キリシタンを如何に処分するかが新政府の重大事件として取り扱われました。そして、明治天皇出席の会議で、浦上村の農民3,384人を20藩に分けて移させ、そこで牢に入れてキリシタン信仰を捨てさせるように説得や拷問を行うようにしたのです。この事件は大きな外交問題となり、外国公使団が「人道に背く」と抗議しましたが、日本政府は受け入れませんでした。

1871年、岩倉具視をはじめ外交使節団がアメリカへ向かいました。日本にとって不平等条約であった通商条約の改正交渉のためでした。ところが浦上四番崩れ事件が原因の一つになって、条約改正交渉は失敗しました。国民の信仰や良心を迫害する国は近代国家として認められないというのでした。

こうして日本政府は、キリシタン禁制の停止を考慮せざるを得なくなり、ついに1873年、キリシタン禁制を廃止することになったのでした。江戸幕府の禁止令発布から259年ぶりのことでした。1889年には、明治憲法において、信教の自由として条文化されることになりました。

#### (i)長崎の教会が次々に建てられる

大浦天主堂が建てられたあと、外国人宣教師たちは長崎県各地の潜伏キリシタンたちが『発見』された地域に活動の場を拡大しました。各地の信者たちは、貧しさを克服して「神の家」を建てることに熱意を注ぎました。

五島、外海、平戸などの各地には、外国人宣教師の設計、指導のもとに日本人の大工が美しい教会を次々建てていきました。鉄川与助という大工の棟梁が建てた教会は、こうした中で生まれ、美しい建物が残されている代表例です。

長崎の教会が訪れる人に感動を与えるのは、こうした先人の歴史的な背景があるからでしょう。

心を静める祈りの場で、建築の物語を聞きましょう。

## (j)かくれキリシタン

先に述べたように、禁教解除後に、カトリックに復帰する者もいましたが、「かくれキリシタン」として禁教時代の信仰を続ける者も多くいました。彼らは、まさに江戸幕府のキリスト教弾圧の間、仏教徒を装い信仰を続けてきた信者の子孫たちなのです。最近まで伝承が継続されている地域としては、長崎県の長崎市外海地区、五島列島、平戸市の平戸島や生月島などの地域があります。

## 第3章 岬の教会

### 岬の教会「被昇天のサンタ・マリア教会」について

1571年の春に長崎に「六カ町」が建造されました。イエズス会のメルチョル・デ・フィグレイド神父は、その町の突端の波止場の傍らに、小さな聖堂を建設しました。1580年、大村純忠がイエズス会に新設された長崎の町を寄進した当時は、町にはすでに400軒の家屋があったといえます。この年に、教会が建設されましたが、これが「岬の教会」でした。イエズス会の記録には、「立派な教会を作るため木材が切り始められた。」とあります。

その他、「岬の教会」に関する記録としては、イエズス会士ロレンソ・メシアによって書かれたものがあります。「二人の日本人が喧嘩をし、教会の中でこの二人が死亡した。このため今日は汚された。そこでヴァリニャーノ神父は、祭壇と大祭壇の「レタブロ」（額面）を取り外すように命じた。事件が終息した後、信者は教会の床を整理し、教会に新しいゴザを敷いた。」と。

その後、この教会が次第に増築され、1585年には大教会の建設が始められました。建築費用は、2000クルサードであり、使用された木材は各地より運ばれました。豊臣秀吉は、1587年7月25日に突如として「バテレン追放令」を發布しましたが、記録によると「教会は日本で一番大きく美しかった」といいます。この時点では、教会の建物はまだ完成していませんでしたが、そのまま放置されました。秀吉は、南蛮貿易への興味から、教会に対して曖昧な態度をとりました。そのために、1590年には、「岬の教会」が礼拝のために使用されることもありました。

1592年、朝鮮出兵を目論んでいた豊臣秀吉は、肥前の名護屋に滞在していました。秀吉は、名護屋城建築のための材木を探していました。そこで、目を付けたのが「岬の教会」に使用されている材木でした。同年、長崎奉行は、ポルトガル人とスペイン人との争いの機会に乗じて、「岬の教会」を解体して、名護屋城に移送しました。しかし、1593年、貿易に興味を持つ秀吉は、ポルトガル人の取次に応じて、もう一度、岬に教会を建てることを許可しました。新しい教会は、

31日間かけて建設されました。そこでの最初のミサは、クリスマスの日に行なわれました。

1594年には、教会の傍らに渡り廊下で繋がれたイエズス会のレジデンシアも建てられました。ヴァレンティン・カルバージョ神父は、1600年の『日本年報』において、興味深い報告をしています。「日曜日のミサは日本人信者で一杯になったので、出口のドアが不足した。そこで、レジデンシアに通じる扉からも退出しなければならなかった。」つまり、長崎の岬の教会は、すべての信者を収容するためには小さすぎたのでした。同年、教会の中で男女を別々にするように、教会の真ん中に手すりが設置されました。当時、長崎の町には、他の教会も存在しましたが、あまりにも小規模であったので、岬に大規模な教会の建築が試みられました。しかし、教会の敷地が不足していました。なぜならば、寺沢奉行が、1592年に部分的に没収していたからです。イエズス会は、長崎奉行にその返還を頼み、幸運にもその願いはかなえられました。

カルバージョ神父の『日本年報』にはこう記されています。新しい教会の縦幅は31畳で、横幅は13畳でした。1畳は長さ8.5パルモ（1パルモ＝22cm）です。それ故、教会の大きさは、縦幅263パルモ（約58.9m）、横幅110パルモ（約24m）でした。周りには、「日本人が好むから」という理由で、回廊が作られる計画でした。教会の内部は、三身廊になるように設計されていました。1601年8月15日、被昇天の祝日に、木材が集められ、壮大に建築工事が始まりました。セルケイラ司教が、定礎式を行いました。10月21日には、同司教の荘厳なミサで献堂式が執り行われました。

フランシスコ・ロドリゲス神父は、1601年の『日本年報』（9月2日付け）で、献堂式の一か月前の教会の様子を次のように説明しています。「この長崎の教会が完成した。前の年報に書かれていたよりも大きな教会となった。それは、パードレも長崎の住民も大規模な教会を望んでいたからである。……そこで、前計画よりも幅が34パルモ（約7.5m）も増築された。海に向かって浜の上部が絶壁になっていたので、建築物を延ばすことはできなかった。そこで、石と材木で懸崖造りにし、教会の土台を浜の崖の上部と高さを揃えるように工夫されていた。つまり教会の床は、懸崖の3階目に造られた。盛り上がった床の中央に大祭壇が設けられ、大祭壇に向かって右側に香部屋、左側に一方に同じ大きさの座敷が作られた。これらの二つの部屋には、祭壇を開くために中二階が作られていた。海の方から見るとこの教会は、高く、美しい造りである。……これから祭壇が設置される所である。」「建築には2600クルサードが費やされた。材木の運搬と建設の仕事の大部分は、信者が無報酬で提供した。

さて、献堂式後の記録は、教会についてどう語っているのでしょうか？ 献堂式の8日後、長崎で大火災が発生しました。火は、北風に煽られて、教会の土地に迫ります。司教の住んでいた館が燃え始めた時、風向きが変わったために、教会は火災にあるのを免れました。1602年の『日本年報』は、「教会は「被昇天のサンタ・マリア教会」と名付けられた。縦幅200パルモ（44m）、横幅100パルモ（22m）以上で、周りには大きな回廊があった」と報告しています。

1603年の『日本年報』は、「被昇天のサンタ・マリア教会」について以下のように報告しています。教会は、三方に回廊を巡らしていました。教会の前には教会と同じ面積の広さの土地がありました。長崎の町に実際に暮らしていたスペイン人商人であるアビラ・ヒロンは、教会には中庭もあったとします。おそらく、この中庭は、教会とコレジヨの間に位置していたと推測されます。また、彼は「ミサの時は、教会の階段は人で一杯になった」と書いていますので、教会の床下は、地面から3、4階上に位置していたと考えられます。教会の扉は、6つありました。しかし、ミサに参加する信者があまりにも多く、6つの扉では対応しきれずに、事故が起こったこともあった、と記録されています。

1603年には、「教会の敷地内にコレジヨの建物が増築され、櫓が作られた。その櫓には、3つの鐘と大きな時計が付けられていた。」と記されています。1604年には、建物がすでに完成したので、祭服か銀のランプなどが備え付けられました。毎年、教会の周りの回廊をめぐる行進が行われた。回廊の幅は、かなりあったのであろうと推測されます。1611年には、聖イグナシオ・ロヨラの列聖の祝日が盛大に祝われました。記録によると「コレジヨの塀にも司教館にも沢山の提灯が飾られ、町にある他の教会や信者の家にも、また川の向こう岸にも、3000の提灯が出た。その夜遅くまで、長崎の人は町から町へ提灯を見て回った。被昇天のサンタ・マリア教会の（提灯は）最後に付けられた。」とあります。

1614年10月27日（月）、最後のミサが行われました。28日、ほとんどのイエズス会員は、レジデンシアから退却しました。29日、最後まで残ったカルバージョ神父が退却しました。その後、平戸の領主・松浦鎮信とその家来たちが、教会に侵入しました。11月3日、平戸の者たちは、教会を破壊し始めました。松浦鎮信は、教会全部を壊す前に、残りの部分に火をつけ燃やしました。8日にその作業が終了しました。教会の敷地内には、コレジヨ、司教館、小学校、印刷所なども併設されていたと記録にはあります。

## おわりに

本講演録が、読者の皆様の長崎開港、そして「岬の教会」の理解に少しでもお役に立てたら幸いである。1751年に大村純忠によって開かれた長崎港は、その後、日本キリシタンの中心地となっていく。この過程で重要な役割を担ったのは、「岬の教会」（「サン・パウロ教会」、後に被昇天の「サンタ・マリア教会」）であった。この「岬の教会」があった場所は、旧県庁所在地である。旧県庁所在地には何らかの重要なキリシタン遺物が埋まっていることは間違いないと思う。2018年に「長崎・天草の潜伏キリシタン関連遺産」がユネスコの世界遺産に登録されたが、「岬の教会」の存在は、この本遺産登録にとっても、まさに「宝」ともいうべきものである。今後、長崎を代表する特別な地として、保存されるべき重要性は有していると考ええる。



### 参考文献

- 浦川和二郎、『キリシタンの復活』、国書刊行会、1979.
- 越中哲也、『長崎学・続々食の文化史—食文化を訪ねて—』、長崎純心大学博物館、2002.
- 片岡弥吉、『浦上四番崩れ』、筑摩書房、1991.
- 片岡弥吉、『長崎のキリシタン使徒たち』、純心女子短期大学、1991.
- 片岡弥吉、『日本キリシタン殉教史』、智書房、2010.
- 岡田章夫編、『図説 日本の歴史—キリシタンの世紀』、集英社、1975.
- 川上秀人、『おいなる遺産 長崎の教会』、智書房、2007.
- 長崎教育委員会、『長崎のキリシタン学校—セミナリヨ、コレジヨの跡を訪ねて—』、1987.
- 純心女子短期大学 長崎地方文化研究所、『プチジャン書簡集』、1986.
- 純心女子短期大学、『耶穌教二関スル書類』、1990.
- フランシスク・マルナス『日本キリスト教復活史』、みすず書房、1985.
- 結城了悟（ディエゴ・パチェコ）、『長崎の教会—1567年～1620年—』、長崎談叢58、1975.
- 結城了悟、片岡瑠美子、『最後の迫害』、六甲出版、1999.

他

(2019年10月2日受理)

